

日韓の親子関係における子供観 - 性別役割期待とその類型化の試み -

The Values of Sons and Daughters in Japan and Korea

坂元一光
Ikko Sakamoto

ABSTRACT

This paper indicates the value of sons and daughters from the parental view in Japan and Korea. The two countries are located near China and have historically shared Confucianism and other cultural influences. But Japan and Korea's cultural interpretation of these influences were very different from each other.

These interpretations also influenced parents views of their children.

For example : (1) sons in Korea are generally valued for carrying on the family line and for old age support; (2) sons in Japan are valued for personality characteristics which make them companions, especially for the father; (3) daughters in Korea and Japan share almost the same value for their personality characteristics which make them companions, especially for the mother.

はじめに

文化人類学や民俗学的な視点から個々の文化の奥深く埋め込まれた子供のイメージを探ろうとするとき、しばしば儀礼や祭のような象徴的行為が分析の対象となる¹。これは文化の古層としての子供観は、日常生活の中で意識化され直接に言及されることが少なく、むしろ非日常的な象徴世界や超自然的存在との結び付きの中でこそ、そのアルカイックな姿を現すものだというひとつの職業的な信念に基づいていると思われる。

しかし、これから小論で取り上げようとしている子供観は、きわめて日常的な文脈に限定されている。すなわち、対象となるのは親子関係を中心に実生活のなかで意識化された子供観であり、親にとっての子供に対するさまざまな意味付けや役割期待の文化的あるいは性的なあり方である。

小論では、日本と韓国における子供一般に関する子供観ばかりでなく、子供を性別によって男児と女児とに分け、親の役割期待としての子供観をさらに細分化して考察する。性別に関する社会・文化的問題に関しては、特にフェミニズムの視点を中心に活発な議論がかわされているが、性別が投げかける問題はなにも大人の社会領域に限定されるものではない。例えば、後

述する親の生まれてくる子供に対する性別選好の問題など、明らかに、親たち自身の価値観の一側面である。しかし、それが女兒嬰兒殺しや選択的中絶などの背景として存在することを考えるならば、大人の価値体系としての性別意識といえども、深刻な子供の領域の問題として捉えざるを得ないことが理解される²。

また、対象社会として日本と韓国両社会を取り上げるが、これは両国が歴史的・文化的に密接な関係を有しながらも、現在の子供の性別選好に関して対照的な傾向を示していること、及びこれまでの研究経緯から、手持ちの関係資料として上記二か国のものが比較的多いという二つの理由によっている。

1. 方法論について

今回、日韓の子供観および性別子供観について考えるにあたり、性的選好や性的役割期待に関する既成の意識調査の資料を利用するわけであるが、この点に関して若干の補足をしておきたい。

人類学のようにフィールドワークを重視する研究領域にあっては、質問紙を用いた意識調査のデータは直接的なインタビューや参与観察に基づいていないという理由で、副次的な位置づけしか与えられないことが多い。なぜなら、質問紙の選択枝や質問項目はあくまでも研究者の仮設にしたがって準備された概念枠組であり、結果として、調査対象者のいわゆるイーミックな思考をそのなかに無理に押し込めてしまうことになり易い。また、はたして回答者が自分の気持ちに正直に答えているのかどうかという疑問も残る。調査者のバイアスのかからない生の資料を研究の重要な手がかりとする立場からすると、質問紙によって得られるそうした情報には多くの問題点があることになる。

ただ、小論のように日本と韓国という大規模で複雑な社会の全体的傾向を考察の対象とする場合、ミクロな社会の参与観察から得られるような人々の複雑で多様な見解は、そのマクロな傾向性の把握の代価として、とりあえず不問に付すのが適当だろう。

また、通文化比較を前提としてひとつの枠組を設定してゆく場合、まず個々の対象社会の特徴的要素を追及するのではなく、それらの社会が共有する特性に着目することが優先される。儀礼行動や象徴様式の分析を通して得られるような文化のより深層に潜む独自の子供観は、今回の考察の射程には含まれていない。ここで求められているのは、あくまでも日常的な親子関係の中で意識化された役割期待としての子供観に限定されている。

さらに、例えば、小論において頻繁に利用されるVOCのプロジェクトの報告書では質問紙の選択項目やその分類は、入念に準備されたプレリサーチのインタビューの内容や自由回答の結果に基づいて案出されたものであり、対象社会の人々の生の声が全く反映されていないということではない(Arnold et al, 1975 12-13)。「子供」のように生活世界のあらゆる次元と深く結び付いた対象に接近するためには、さまざまな視点と資料形態を駆使した多元的なアプローチが有効であろう³。今回用いる方法もそうしたアプローチの一環として採られたものである。

それでも、上記の手続きによって得られる子供観は、親たちの断片的な意味付けや期待を、いわばモザイクのように集めて作り上げたものであり、豊かな生の厚みを持った本来の子供のイメージからはおよそかけ離れた姿でしかないかもしれない。また、用いられた資料自体、い

くつかの独立した調査結果を集めたものであり、論考の一貫性や実証性を保障するのに決して十分とは言い難い。

しかしながら、小論の主眼のひとつは、検証可能な仮設の提示にあるのではなく、通文化的に比較可能な子供観に向けてのひとつの理念型の模索である。そうした意味において、意識調査ごとの質問項目の不統一や年齢、性別ごとの細かい差異については、必要最少限しか触れず、大きな傾向や特徴の把握を優先した。このような限界を十分に認識した上で、東アジアの産育文化論の基礎的作業のひとつとして、特に社会・文化的背景を考慮しながら、日韓の子供観および性別子供観の相違について概観しようとするものである。

2. 役割期待の子供観とその類型化

子供に対する親の意味付けのあり方を把握する方法としては、質問紙による意識調査から理論的な類型化の試みまで両極がありうる。例えば、前者の例としては、総務庁青少年対策本部が実施した「日本の子供と母親」調査（1987）の中に子供を産み育てる意味を問う項目がある。しかし、筆者の知りうる限りでは「the Value Of Children」いわゆるVOCのプロジェクトの報告書にその意味付けの最も詳細なリストを見ることができる。そして、それは親たちの子供に対する役割期待の総カタログの観を呈している。

このVOCのプロジェクトは1972年から1977年にかけて、ハワイ大学東西センターの人口問題研究所を中心に実施された子供の費用と価値に関する通文化的学際研究である。対象国は日本を始めとして、韓国、台湾、アメリカ（ハワイ）、フィリピン、タイの六ヶ国にわたり、国、階層、居住地ごとに夫と妻それぞれ180名づつが選定された。主として心理学的枠組と社会学および統計的分析を用いて進められた⁴。

調査では、まず子供の数や性別などの要素と結び付けない、ごく一般的な子供の意味についての質問（「あなたの周囲の人びとが子供を欲しが理由は何だと思えますか？」）から49の子供の価値項目を抽出した上でこれを九つに範疇化し（1-a）、さらにそれを五つの項目に整理している（1-b）。

（1-a）六ヶ国の意識調査に表れた子供を持つ意味

1. 幸福、愛、親密さ(Companionship)

親密さ、孤独の回避

愛、愛情

遊び、子供と遊ぶ面白さ、退屈の回避

緊張からの解放、悩み事からの気晴らし

それぞれの親にとっての幸せ

家族にとっての幸せ

独自性、親子関係の特殊性

2. 親の人格の成長

人格の成長、責任感、成熟、道徳

- 子供を持つことが出来たという励み
 - 自己実現、人としての完成
 - 自己の拡大
 - 子育てから得る経験
 - 父親らしさ、母親らしさ
 - 多産、男らしさ・女らしさの証明
3. 子育ての満足感
- 子供の達成に対する親の誇り
 - 子供が成長発達することから得る喜び
 - 親の希望や野望を実現してくれる子供
 - 価値ある物事について導き教え込む機会
 - 自己の子育て能力及びその成就における満足
 - 子供を養うことの満足
4. 経済的利益、保障
- 老後の経済的援助
 - 老後の世話、慰め、親密
 - 老後の一般的世話
 - 経済的援助（老後という言葉及なし）
 - 慰め、世話（老後という言葉及なし）
 - 家事や課程の雑用の手伝い
 - 経済的分担、保険、保障
 - 自営・農業の手伝い
 - 子守
 - 一般的な手伝い
5. 家族にとっての価値
- 夫婦の絆としての子供
 - 結婚を完全なものにする子供
 - 家族、家族生活を完全なものにする子供
6. 親族にとっての価値
- 家名の継承
 - 家族の伝統の継承
 - 家族の名声を高める
 - 将来の孫を持つ
 - 家産の相続人としての子供
 - 宗教儀礼、祖先崇拜
 - 親族の力の拡大

日韓の親子関係における子供観

配偶者の希望を満たす
他の親族の希望を満たす

7. 社会・宗教的要請

社会規範の遵守
宗教規範の遵守
社会の利益としての子供

8. 一般的、本質的価値

宝、富、財としての子供
子供を持つことの自然性、本質性
子供が好き、とにかく欲しい

9. その他

(1-b) VOCプロジェクトにおいて再コード化された子供の価値

1. 情緒的価値

幸福、愛、親密さ、楽しみ、あるいは緊張からの解放や退屈・孤独の回避など。

2. 経済的価値および保障

家事、自営、農作業、兄弟姉妹の世話、賃金労働における手伝いから得られる便益、経済的支援、情緒的世話や保障を含む親の老後の保障。

3. 自己の成長あるいは自己啓発

子育ての経験から学ぶこと、責任感と成熟の獲得、人生の目標と刺激、一人前の大人（男、女）として認められること、自己実現、親としての權威を味わう。

4. 子供との同一化

子供の成長発達を見守ることの喜び、子供の達成を誇りとする、子供における自己の投影。

5. 家族の絆と維持

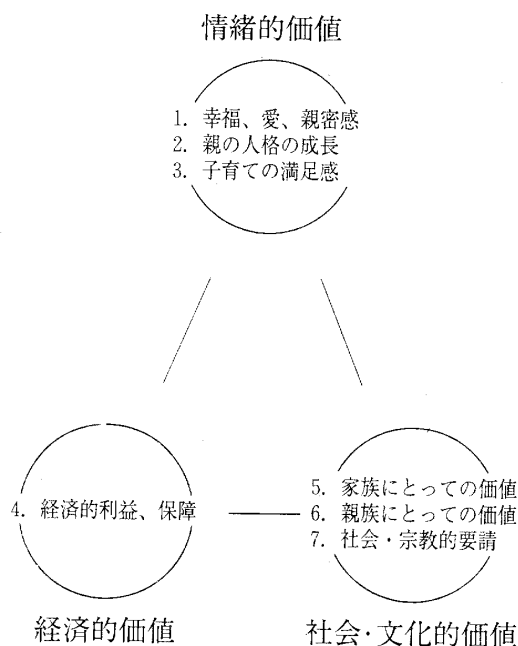
夫婦の絆としての子供、結婚の完成、家族生活の完成、家名と家系の継承、相続人の確保、未来の孫の確保。

対象となった六ヶ国における親の子供に対する役割期待は、上記の項目によっておおかた網羅されているとあって良いだろう。これら役割期待のカタログによって示されているのは六ヶ国におけるひとつの最大公約数的な子供観であり、それはまた日韓における子供の価値について検討する際においても利用可能であると思われる。

VOCプロジェクトにおける詳細な子供の役割カタログに対し、社会学のゼリザーは子供の価値を大きく経済的価値と情緒的価値の二つに分けながら19世紀末から20世紀初頭の米国社会における子供に対する意味付けの転換を論じている(Zelizer,1985)。そこでは米国社会の産業化の進展にともない、大人の「生」からはっきりと「聖別化」(sacralization)され、親にとって経済的に有用な存在から情緒的な満足感を与えてくれる存在へと「文化的に再定義」(cultural redefinition)されてゆく子供の姿が説得的に描かれている。

ゼリザーは出生力の経済学的研究や児童労働の問題などの従来の社会科学的な子供の価値研究から抜け落ちてきた心理(情緒)的側面の存在を再認識させる一方で、産業化を基軸に複雑に細分化しがちな子供の価値を経済と情緒という二通りの存在様式に還元するひとつの明快なモデルを提起している。

図1 子供の価値の三類型



このようなゼリザーのモデルは、ある意味で子供の価値研究におけるひとつの極をなしている。産業化、近代化を軸に子供の保険や子供の葬法などの分析を通して得られた二元的類型は、子供の価値を総体的にとらえる上で有用な枠組である。しかし、今回のように東アジアの社会を対象に、社会・文化的視点からこれを検討してゆく場合においては、ゼリザーの経済価値と情緒価値の二分法では不十分の感をまねがれない。すなわち、子供を取り巻く社会・文化的意味付けをすくい上げるもうひとつの価値範疇が必要と思われるのである。

例えば社会の編成原理としての父系血縁システムは韓国の子供の価値について考える際の極めて重要な背景であり、この要素への言及なしには、少なくとも韓国の子供への意味付けに関する十分な説明は不可能である。特に、社会・文化的視点を重視する小論では社会・文化的規範、構造的特徴などを考慮する

ためのもうひとつの範疇が必要と思われる。そこで、今回、以下の論を進めてゆくにあたって、ゼリザーの二類型を継承しつつ、これに上記のような特徴を考慮しうるよう、新たに社会・文化的側面を加えた子供の価値の三類型を基本枠組として考えてみた(図1)。なお、VOCの項目(1-b)の三類型への配分であるが、とりあえずは4を経済的価値に、5、6、7を社会・文化的価値に、1、2、3を広義の情緒的価値に当てはめて考えてみた。

日韓の子供観

以上のように設定された子供観の三側面を前提に、まず、韓国と日本の子供に対する一般的な役割期待から見てゆく。(表1)はVOCによる「あなたの周囲の人びとが子供を欲しが

日韓の親子関係における子供観

由は何だと思えますか?」という質問に対する回答（複数回答、3つまで）を集計した結果である⁵。

表1. 子供を欲する理由（韓国）

社会経済集団	1	2	3	4	5
	理由 %	理由 %	理由 %	理由 %	理由 %
都市中流	家系の継承 33	家族の幸福 32	子供を持つのは自然なこと 18	子育ての能力、成就における満足感 18	将来の孫を持つこと 14
都市下層	家系の継承 53	家族の幸福 26	子供を持つのは自然なこと 17	子供の成長発達から得る喜び 14	親密感、慰め老後の世話 14
地方居住者	家系の継承 59	親密感、慰め、老後の世話 17	社会規範の遵守 13	多産、男らしさ、女らしさの証 12	子供の達成に対する誇り 10 老後の経済的援助 10

【Arnold et al 1975】表4. 6より一部抜粋

表2. 子供を欲する理由（日本）

社会経済集団	1	2	3	4	5
	理由 %	理由 %	理由 %	理由 %	理由 %
都市中流	家族の幸福 16	生きがい 15	子供を持つのは自然なこと 14	家族を緊密に結び付け完成させる 14	跡取り、家産の相続者としての子供 14
都市下層	家族の幸福 21	子供が好き単に欲しい 15	分からない 15	子供を持つのは自然なこと 13	跡取り、家産の相続者としての子供 10 生きがい 10
地方居住者	跡取り、家産の相続人としての子供 32	生きがい 22	家族の幸福 22	親密感、孤独の回避 11	親個々人にとっての幸せ 9

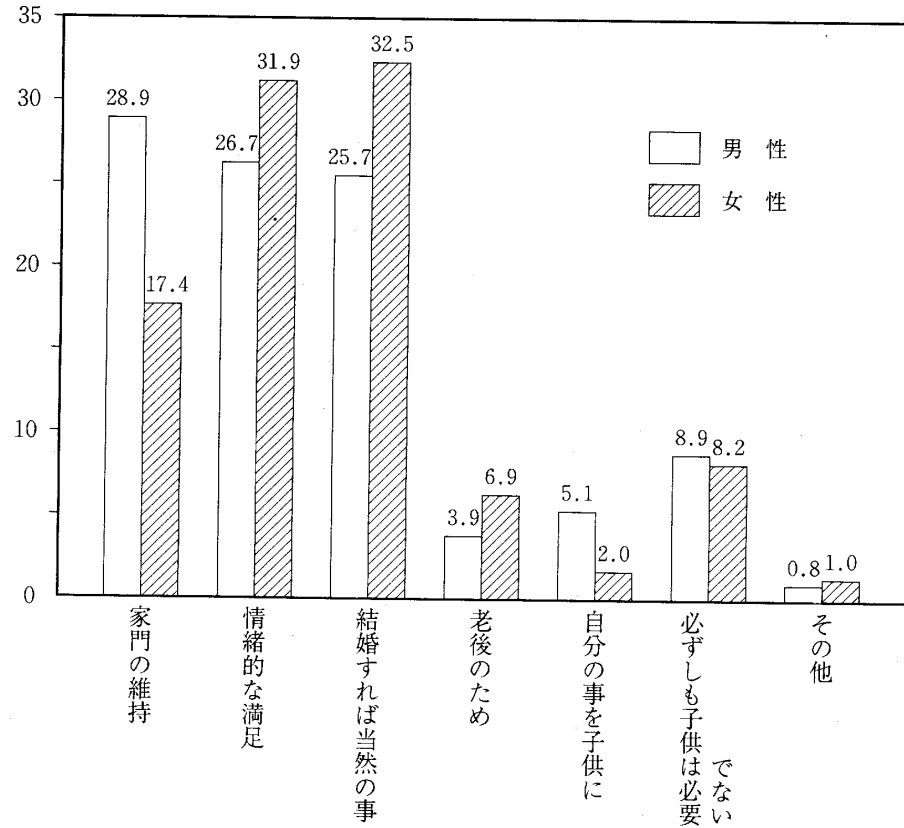
【Arnold et al 1975】表4. 6より一部抜粋

韓国の場合、まず何よりも「家系の継承」者としての期待の高さを指摘しなければならない。これは、韓国の家族を論ずるときには必ず触れられる側面であり、急速に薄れつつある日本のイエの継承意識とは大きく異なる部分である。この違いは儒教イデオロギーに裏打ちされた強固な父系血縁システムを維持する韓国と、イエ制度を早くから廃し韓国のような血縁システムを持たない日本との社会構造上の差異を反映するものと思われる。

また、経済的価値の側面であるが、一応「老後の世話」という期待にある程度読み取ることができる。特に地方において多少、強い傾向が見える。地方を中心に老後の援助を子供に期待するこのような傾向は、後述する他の老人扶養観に関する調査結果とも一致しているように思われる。

一方、情緒的価値の側面については全体にそれほど強く出ていない。しかし、最近アジア女

(グラフ1) 性別にみた子供をもつ意味
(%)



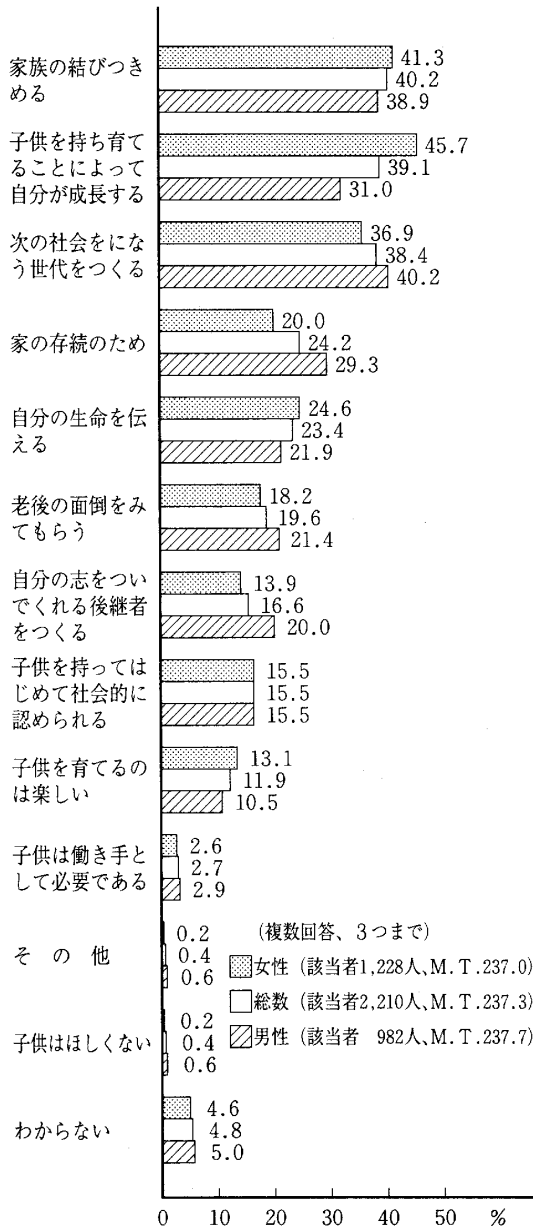
(アジア女性交流・研究フォーラム
「日本と韓国の家族意識の比較研究」P192)

性交流・研究フォーラムと韓国女性開発院が共同で行ったソウルの調査（「日本と韓国の家族意識の比較研究」）⁶ではこの項目が「家系の継承」を押さえている（グラフ1）。これはソウルという都市部の意識であり、またごく最近（1991年）の調査であるということに起因するものかもしれない。実際、（表1）でも都市部に限定してみると情緒的な理由が「家系の継承」という理由に接近していることが理解される。

次に、日本における子供に対する社会・文化的期待の様子はどうか（表2）。韓国の場合にくらべて、まず「家系の継承」に直接言及する傾向は強くない。これは先に述べた日韓における族制的な差異からきていると考えられる。ただ、地方における「跡取り・家産の継承者」の項目に「家系の継承」に関連する内容を見出し得るが、これはいわゆる農村地域で特に重視される期待であり、全体で強く共有されている傾向とは言い難い⁷。むしろ、これは他の調査結果（総理府「日本人の家庭観」⁸、総務庁「日本の子供と母親－国際比較－」⁹）に表れていることであるが、「家族の絆」という項目の中に社会・文化的価値に近い内容を見出しうる。（グラフ2）、（グラフ3）（ただし、この回答は家庭の心理的紐帯を強めるとも解釈できるところから、該当する範疇を社会・文化的価値にのみ限定することに関しては検討の余地があるとおもわれる。）

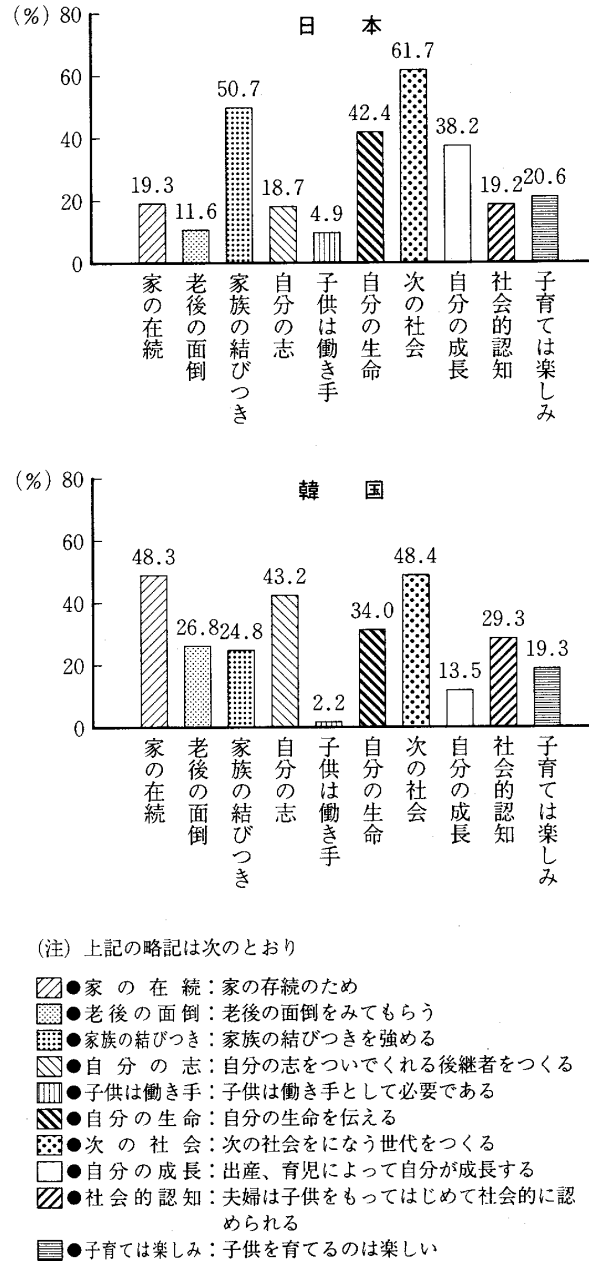
日韓の親子関係における子供観

(グラフ2) 子供を育てる意味



(総理府「日本人の家庭観」P13)

(グラフ3) 子供を産み育てることの意味

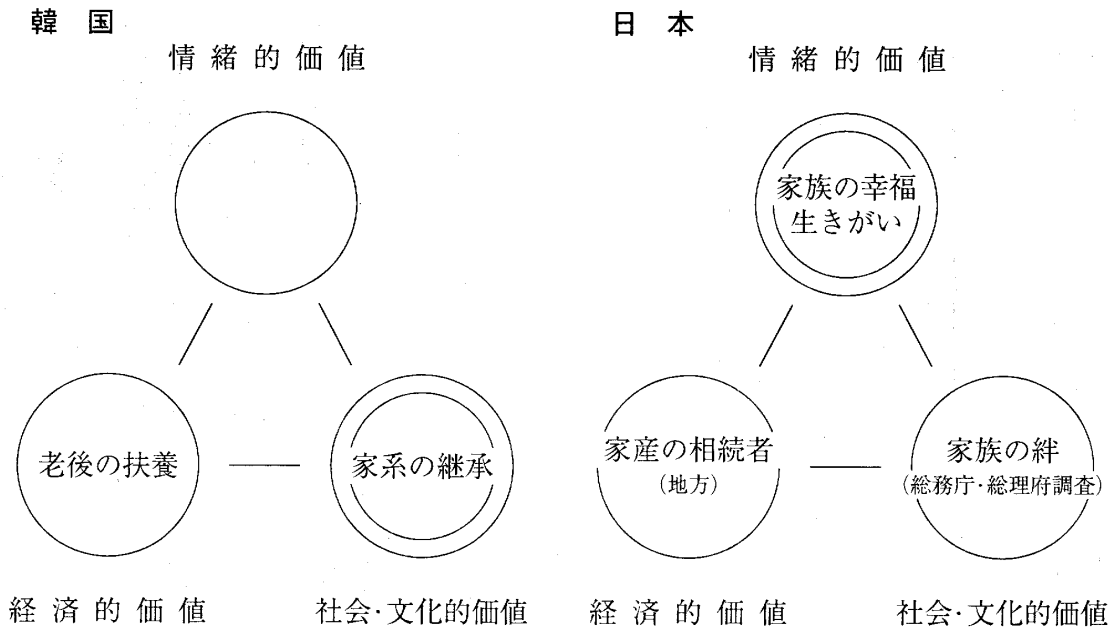


(総務庁「日本の子供と母親」P158より一部抜粋)

さらに、この項目からは家産の継承者としての経済的役割期待もうかがうことが出来る。ただ、この場合、老後の世話や労働のように直接的な援助を期待するのではなく、不動産などの散逸を防ぐというより消極的な意味で捉えるのが妥当と思われる。

最後に、情緒的側面であるが、これは「家族の幸福」や「生きがい」といった項目に相当し、全体として多くの支持を受けている。少なくとも、家系の継承や老後の世話といった実際の役割期待よりも高い期待と関心をうかがうことが出来よう。また、異なる選択枝によって問われた総理府や総務庁の調査結果では、「自己の成長」という項目が情緒的側面として顕著に示され

図2 日本と韓国の子供の価値類型



ているようである。(図2)は韓国と日本の子供の価値類型を対比的に示してみたものである。

次に、この結果を下敷に、さらに男児、女児という性別要因を考慮することにより、日韓の子供に対する役割期待の配分のあり方を検討するわけであるが、その前に性別子供観と密接に関連していると思われる性別選好について確認しておきたい。性的選好はその社会全体が示す親の子供の性別に対する選好(preference)であり、その傾向性は男児や女児に対する親たちの役割期待を大きく反映していると考えられる。

3. 性的選好から見た日韓の子供観

子供観とは子供あるいは子供期に関するその社会における意味付けの体系である。意味の体系としての文化の多様性を考慮するとき、単に子供一般の意味付けに限らず子供の性別においてもその意味付けが異なることは十分に予想される。

性的選好は、まず、この子供の性別による意味付けの違いの存在を暗示する。ある性的選好を示す社会はそうした傾向を生み出すに至る何らかの背景を持っているはずであり、その背景は意識調査のなかで選好の理由として親たちによって言及される。そして、その理由はその社会の親たちの子供に対する役割期待あるいは意味付けの表現に他ならない。

N・ウィリアムソンは、従来まで人口学的な関心の領域にとどまっていた性的選好(sex-preference)の問題を、フェミニズムの視点から社会・文化的文脈において捉え直したばかりでなく、文明社会から無文字社会にいたる広い範囲の社会を対象に検討した。彼女は、その著『息子か娘か』のなかで世界のセクス・プレファレンスに関する膨大な資料を駆使しながら、その実態を整理し、この二通りの社会的傾向の背景についての仮説を提出している。多少、長くな

日韓の親子関係における子供観

るがそれを以下に紹介する。

男子選好の理由

A. 経済的理由

1. 家族にとって息子の方が娘よりも生産的(productive)ならば、その親は男児を欲する。例えば、娘の結婚に際してその労働力が夫の家族のものとなる場合や女性が子育て、体格、筋力における不利のためにある重要な活動（鋤耕、猟、戦闘）に不向きである場合や、その家族の現金収入の為の仕事が男性にのみ適当と考えられている場合など。
2. 自分たちの老後の世話を主として息子に期待しているならば、その親は男児を欲する。
3. 結婚に際して娘が婚資を要求され、反対に息子がその家族に婚資をもたらす場合、親は男児を欲する。
4. ただし、娘が子育て、家事、農業、自営のような仕事に参加したり母親に同性的親密感をもたらす場合、男児を欲する親も少なくとも一人の娘を欲する。また、一人の娘を持てば家庭内の性的役割分担や労働の性的分業を維持するのに役立つ。（娘があれば男児が「女の仕事」をさせられることがない）
5. 男児が社会的に成功する機会をより多く持っているとき、親は男児を欲する。
6. 低い所得層（あるいは被差別民族集団）の親は息子が経済的保障や保護を提供すると考えられている場合、裕福な層の親よりも息子を欲する。

B. 社会的理由

1. 居住規制が父方居住で、出自様式が父系的な場合、親は男児を欲する。これらの形態では、娘はその労働力、忠節、子供など夫の家族に供与することになる。
2. 男性の相続人を確保し家系と家名の存続を維持することが重要である場合、親は男児を欲する。祖先崇拜が実行されている場合、特にそうである。
3. 共同体のなかの重要な集団間に葛藤があるような地域に住んでいる場合、親は男児を欲する。
4. 息子を必要とするような社会的・宗教的慣習がある場合、親は男児を欲する。
5. 親が拡大家族のなかで生活し、家族の永続性の圧力の下にある場合、彼らは男児を欲す

る。

6. その家族が都市よりも農村地域に居住している場合、親は男児を欲する。それは、伝統的な家父長家族は都市部ではあまり影響力を持たないだろうし、都市住民は性的平等、女性の機会、女性の新しい役割、家族からの個人の自由などを支持すると思われるからだ。最後に、息子は都市部では相対的に有利ではない。

7. 特定の文化・宗教では伝統的に男児選好を奨励してきた。このような宗教あるいは文化に属する親は男児を欲するだろう。このような集団の例としては、中国人、ムスリム、ユダヤ人などがある。また、より伝統的な宗教集団の親はより個人主義的で新興の宗教集団の親よりは男児を欲するだろう。

C. 心理的理由

1. 息子を持つことが男らしさの象徴である場合、あるいは息子が男に対して娘より大きな同性的親密感をもたらす場合、男は娘よりも息子を欲するだろう。

2. 女性はより高い地位、保障、影響力を得るために息子を欲するだろう。この仮説は女性が男性として生まれなかったという事実を補償するために息子を欲しがるというフロイトの理論と結び付いている。

3. 男児の方が育て易いと考えられている場合、親は男児を欲するだろう。

(Williamson 1976 20-21)

女兒選好の理由

A. 経済的理由

1. その社会のなかで女性が財産あるいは交換のための媒体と考えられている場合、女兒の方が好まれるだろう。

2. その社会のなかで女性が男性よりも経済的生産力を有する場合、親は女兒の方を好むだろう。

3. 親の老後が娘に依存しているならば、娘が好まれるだろう。

4. 娘がその家族に婚資をもたらすならば、親は娘を好むだろう。

B. 社会的理由

1. 親族体系が母系的に組織化されている場合、その家族の家系を維持するために女兒が好まれるだろう。

C. 心理的理由

1. 娘の方が育て易いと考えられている場合、女兒が好まれるだろう。
2. 子供の時あるいは大人になっても娘の方が頼りになると考えられている場合、親は女兒の方を好むだろう。
3. 将来において（父親と）息子との競合関係が予想されるとき、男たちは娘の多いことを望むだろう。

D. 養子

1. 女兒の養子は男児の養子よりも新しい家庭に適応的であると考えられているかもしれない。
2. 父系社会においては、親が家系をよそ者(outsider)に継がせることに不安を持っている場合、女兒は家系を継承することが出来ないために、女兒の養子は親にとって都合がよい。
3. 東洋人の女性は美しいという考えのために、養子の子供が東洋人の場合、女兒の方が好まれるだろう。女兒は結婚相手を容易に見いだし得るかもしれない。さらに、成長して身長がさほど大きくなくても、男児よりは女兒の方が有利である。

(Williamson 1976 23-24)

以上のように性的選好の理由として提出された項目は性的選好を生み出すに至る社会・文化的背景のみならず、男児や女兒に対する親たちの役割期待も示している。性的選好の実態とその背景の把握は、子供の性別にもとづく役割期待の社会的配分のあり方を考える上での重要な手がかりを提供しているのである。

この性的選好という視点で両国の現状を見ると、まず注目すべきは、韓国社会における男児選好と日本社会におけるバランス選好あるいは女兒出生への期待の増加の傾向である。例えば、データの若干古いながら、(表3)、(表4)は韓国における男児選好意識を具体的に示す一例である。表中のMは男児をFは女兒を示している。(表3)の韓国行動科学研究院における1970年代の子供の性別希望調査では、特に奇数の希望子供数の部分にその傾向が表れている。(表4)の韓国人口保健研究院の調査では、男児をすでに持っている場合に比べ、子供がすべて女兒ばかりの場合は出産を継続しようとする様子が示されている。これも男児の必要性

表3. 理想性別組み合わせ (韓国)

理想子供数	回答数(%)	理想性別組み合わせ	回答数(%)
1人	4 (.21)	OM1F	2 (50.00%)
		1M0F	1 (25.00)
		性別無関係	1 (25.00)
2	128(6.94)	0M2F	0 (0)
		1M1F	114 (89.06)
		2M0F	10 (7.81)
		性別無関係	4 (3.13)
		0M3F	0 (0)
3	975(52.82)	1M2F	10 (1.03)
		2M1F	939 (96.31)
		3M0F	9 (.29)
		性別無関係	17 (1.74)
		0M4F	0 (0)
4	448(24.26)	1M3F	2 (.45)
		2M2F	344 (76.79)
		3M1F	99 (22.10)
		4M0F	3 (.67)
		性別無関係	0 (0)
		0M5F	0 (0)
5	283(15.33)	1M4F	0 (0)
		2M3F	4 (1.41)
		3M2F	269 (96.05)
		4M1F	7 (2.47)
		5M0F	0 (0)
		性別無関係	3 (1.06)
		無回答	7 (.38)
計	1,845(99.95)		1,845(99.95)

【Lee&Lee1973】

表4. 現存子女の性別による追加子女を望まない比率 (韓国)

現存子女数	子女の性構成	1974(a)		1979(b)	
		回答数	比率	回答数	比率
0人	-	168	12.45%	614	8.0%
1	1M0F	267	16.5	835	22.5
	0M1F	230	11.7	648	13.1
2	2M0F	224	77.0	849	82.9
	1M1F	361	71.2	1,310	77.6
	0M2F	112	35.7	371	34.8
3	3M0F	128	93.8	386	94.8
	2M1F	402	96.5	1,200	98.2
	1M2F	252	81.7	897	87.2
	0M3F	60	46.7	193	43.5
	4M0F	49	100.0	127	98.4
4	3M1F	180	98.9	554	99.8
	2M2F	302	97.7	840	99.8
	1M3F	176	81.3	465	93.5
	0M4F	31	54.8	87	42.5
	5M0F	27	96.3	33	100.0
5	4M1F	62	100.0	156	99.4
	3M2F	145	99.3	381	99.7
	2M3F	170	99.4	477	99.2
	1M4F	78	80.8	264	92.8
	0M5F	16	43.8	37	40.5
総数		3,851(c)	74.2	11,602	75.2

資料：a) 韓国経済企画院調査統計局&韓国家族計画研究院 (1977) T351
 b) 韓国人口保健研究院、韓国避妊普及実態調査 (未発表)
 c) 6人の子を持つ婦人も含む [朴・趙:1984]

表5. 理想子供数別、理想男女児組合せ別夫婦割合 (日本)

理想子供数	理想男女組合せ	理想性別組み合わせ (%)	
		第8次調査 (昭和57年)	第9次調査 (昭和62年)
1人	男1人, 女0人	51.5(17)	37.1(20)
	男0人, 女1人	48.5(16)	62.9(34)
	男2人, 女0人	8.8(121)	4.1(72)
2人	男1人, 女1人	82.4(1,134)	85.5(1,515)
	男0人, 女2人	8.9(122)	10.4(183)
	男3人, 女0人	0.7(11)	0.5(14)
3人	男2人, 女1人	62.4(1,025)	52.3(1,372)
	男1人, 女2人	36.2(594)	46.2(1,211)
	男0人, 女3人	0.7(27)	1.0(27)

注) ()内は標準規模 [阿藤 ほか 1988a]

表6. 希望子供数別男女組合せ (日本)

希望子供数	希望男女組合せ	希望の子 (人)			
		男子		女子	
		第8次調査	第9次調査	第8次調査	第9次調査
1人	男1人, 女0人	36(80.0%)	30(69.8%)	31(59.6%)	43(51.8%)
	男0人, 女1人	9(20.0)	13(30.2)	21(40.4)	40(48.2)
	男2人, 女0人	87(7.9)	68(5.7)	11(1.3)	30(2.9)
2人	男1人, 女1人	1,003(91.0)	1,103(92.9)	773(94.0)	952(91.4)
	男0人, 女2人	12(1.1)	16(1.4)	38(4.7)	60(5.7)
	男3人, 女0人	14(2.4)	19(2.9)	4(0.9)	4(0.7)
3人	男2人, 女1人	477(80.2)	504(77.9)	310(67.0)	331(62.0)
	男1人, 女2人	100(16.8)	120(18.6)	148(32.0)	195(36.5)
	男0人, 女3人	4(0.6)	4(0.6)	1(0.1)	4(0.8)

注1) 「いずれ結婚する」と答えた者のみ。
 2) 男女組合せについて希望のある者についてのみ。
 [阿藤 ほか1988b]

日韓の親子関係における子供観

表7. 現在妊娠中の児の性別の希望

	調査1 (9月)	調査2 (10・11月)
女の子	662名 (33.1%)	221名 (33.6%)
男の子	323 (16.2%)	107 (16.3%)
どちらでも	1,009 (50.5%)	322 (49.0%)
不明	3 (0.2%)	7 (1.1%)
計	1,997 (100.0%)	675 (100.0%)

(資料) 小林・唐沢「妊婦の意識調査」1989
財母子衛生研究会

を強く物語るひとつの例である。

一方、日本社会の場合、韓国のように明確な性的選好が存在しているわけではないが、「人口問題研究所」や「母子衛生研究会」の調査報告にはバランス選好に加えた形で女兒出生への期待の増加についての指摘がみられる(阿藤他1988 a、b、小林他 1989)¹⁰。(表5)、(表6)、(表7)。

韓国の男児選好については、多くの調査や論考のなかで行動および意識の両面にわたる実態が指摘されているし、筆者自身も触れたことがあるので、ここではその背景を簡単にのべるとどめる。

韓国社会における男児選好は、基本的に伝統的な父系的族制を背景にした構造的要請として現れたものと考えられる。これはウィリアムソンの提示した男児選好の理由のうちの主としてB.社会的理由の項目に相当している。韓国では、父系社会を制度面から支える家(チブ)の継承と宗教的側面から支える祖先祭祀は男子にのみ許された役割である。特に長男は両親との同居による老後の扶養も期待され、その社会的存在価値において、これらの重要な役割から排除されている女兒の場合とは大きく異なるものがある。韓国における男児選好は、産業化や都市化の進展のなかで従来からの規範や意識に多少の変化は見られるものの、依然として深刻な社会問題のひとつとして存続している。

一方、日本社会における女兒志向への「きざし」についての説明は韓国の男児選好ほど容易ではない。ウィリアムソンの女兒選好の理由の中にも、日本のケースを十分に説明する項目は見あたらない。しかし、あえてその背景を推測するならば、まず、韓国のように厳格な父系血縁のシステムがなく、新民法下におけるイエ制度の廃止によって家父長的な構造基盤が失われてきた。また、戦後の民主主義的な平等観のもとに種々の社会・経済的諸権利が、不完全ながらも、女性に対して開かれ、そうした諸権利と男性とを従来どおりに結び付けて考える必要がなくなってきた。

さらに、急激な産業化と価値変化に伴い、子供の経済的価値は希薄化してきた。その反面、子供や子育てそれ自体から得られる情緒的価値への志向は強まる一方である。こうした子供への期待のあり方の変化は、男性を中心にくりひろげられる競争社会の熾烈さや男児の成長過程における行動の不連続性からくる子育ての上での困難さなどに関する一般的認識の中で、愛らしさ、従順さといった「女兒のもつ特性・行動」に対する期待感を相対的に高めつつあるのかもしれない。

表8. 男児を欲する理由（韓国）

社会経済集団	1	2	3	4	5
	理由 %	理由 %	理由 %	理由 %	理由 %
都市中流	49 家系の継承	33 慰め、世話 (老後とは 触れず)	16 家族の伝統 の継承	10 社会規範の 尊奉	9 将来の孫を 持つこと
都市下層	68 家系の継承	35 慰め、世話 (老後とは 触れず)	17 老後の親密 感、慰め、 世話	9 経済的責任 の分担：保 険、安心	6 社会規範の 尊奉
地方居住者	51 家系の継承	25 親密感、慰 め、老後の 世話	20 慰め、世話 (老後とは 触れず)	13 老後の経済 的支援	13 宗教儀礼、 祖先崇拜

【Arnold et al 1975】表4. 12より一部抜粋

表9. 男児を欲する理由（日本）

社会経済集団	1	2	3	4	5
	理由 %	理由 %	理由 %	理由 %	理由 %
都市中流	29 男児の性 質、行動	23 父親との親 密感	12 家名の維持	9 性比を考え て	7 自己の拡張
都市下層	53 男児の性 質、行動	32 父親との親 密感	19 跡取り、家 産を受け継 ぐ者	15 一般的な援 助（老後 には触れず）	8 親の望みや 期待を達成 する
地方居住者	64 跡取り、家 産を受け継 ぐ者	18 男児の性 質、行動	10 父親との親 密感	8 老後の一般 的援助	7 一般的援助 (老後に触 れず)

【Arnold et al 1975】表4. 12より一部抜粋

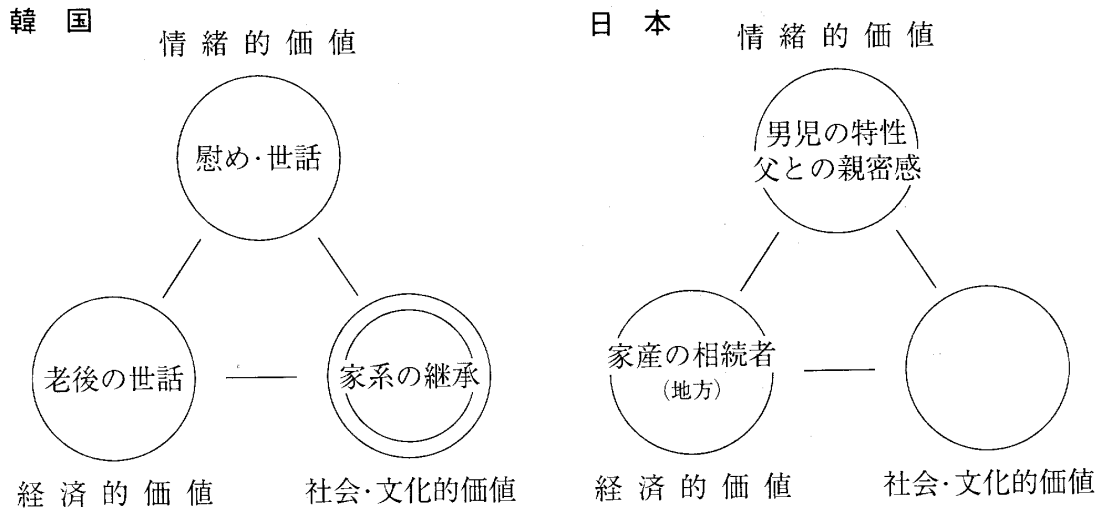
4. 日韓の性別子供観

男児観

韓国社会における親との関係における男児観は、先に見た性別選好の実態と考え合わせることにより、比較的明瞭に規定できる。すなわち、男児選好の理由がそのまま男児への役割期待を反映しているのである。（表8）は「子供の中には少なくとも一人の男の子が必要」と答えた人に対してその理由を尋ねた結果である。これを見ると男児を望む理由の第一位は「家の継承」でありすべての社会経済集団で一致している。何よりもまず、韓国社会では「家の継承者」としての男児への役割期待を見いだすことが出来る。

次に注目すべきは、「情緒的満足をもたらす者」としての役割期待である。具体的には「慰め、世話」として回答されている側面であり、老後の扶養を前提とした「経済的支援」とは区別される。このような役割期待は最近のソウル調査においても支持されている（グラフ1）。ただし、地方の場合、老後への言及が多い。最近、韓国人の家族観研究の一部として、その老人

図3 日本と韓国の男児の価値類型



扶養観を調査した金泳謨も都市部に比べ農村地域における老人扶養の義務感の強さを指摘しており（金1990 50-52）、このことは上記の地方における男児に対する役割期待の特徴を支持している。

以上のことから、韓国社会における男児に対する役割期待をまとめると、「家の継承者として、また老後の扶養者としての社会的側面を強く持ち、生涯にわたる情緒的満足を期待される存在」としての姿が浮かび上がってくる。

具体的な役割期待が特徴的に示される韓国の親たちの男児観に対して、日本社会の場合の男児観は若干、その様相を異にしているようである（表9）。まず、顕著に求められている期待として上げられるのは、「男児自体の性質」とか「父親との親密さ」の二つの項目である。これらは一応「情緒的価値」のカテゴリーに含めることが出来るだろう。しかし、一方において地方では、「跡取り」としての期待も大きく、韓国の場合と同じく、この点に関しては地域的差異もあるようである。また、継承という意味で共通する部分を含んではいるけれども、韓国の場合、家系やチプなど、どちらかと言えばイデオロギー的制度の継承であるのに対し、日本の場合には家屋や家産など具体的な内容を対象としているところに違いが見い出せる。

以上のことから、日本社会における親の男児観としては「その性質によって特に父親の情緒的満足を満たすとともに、一部（地方）で家産の継承者としての役割も期待されている存在」としての姿がうかがわれる。（図3）はこのような韓国と日本の男児の価値類型を対比的に示してみたものである。

女兒観

韓国社会の男児における役割期待は性的選好の実態との比較を通してかなり明快に把握する

表10. 女兒を欲する理由（韓国）

社会経済集団	1	2	3	4	5
	理由 %	理由 %	理由 %	理由 %	理由 %
都市中流	56 女兒の性質、行動	34 母親との親密感	22 家族の幸福	11 子供にとって異性の兄弟姉妹があった方が良い	10 親の好む性別
都市下層	54 母親との親密感	31 女兒の性質、行動	23 家族の幸福	18 愛、愛情	15 家事の手伝い
地方居住者	35 女兒の性質、行動	31 家事の手伝い	31 母親との親密感	10 社会規範の尊奉	10 親の好む性別

【Arnold et al 1975】表4. 13より一部抜粋

表11. 回答者性別の男児／女兒を欲する第一の理由

理由	男児を欲する理由(%)		女兒を欲する理由(%)	
	妻	夫	妻	夫
家名の継承	59	69	1	5
経済的・实际的援助	9	5	1	1
家事・子守などの手伝い	0	0	3	2
親密感	7	3	55	46
老後の世話	17	7	4	1
家族の絆	2	1	10	15
他	6	14	24	29

【Arnold&Kuo 1984】表2、表3より作成

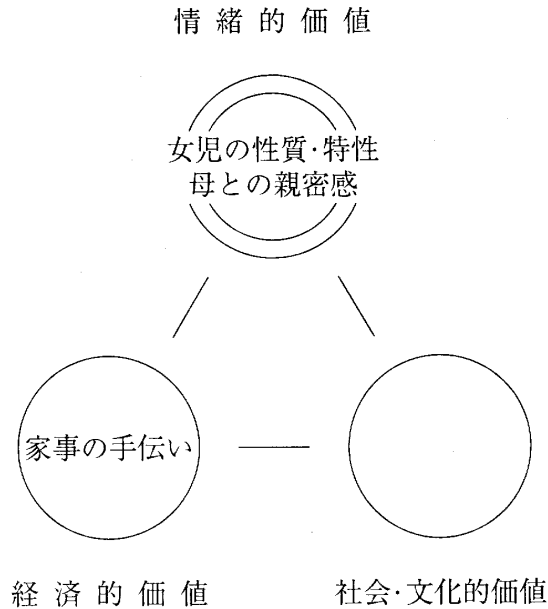
表12. 女兒を欲する理由（日本）

社会経済集団	1	2	3	4	5
	理由 %	理由 %	理由 %	理由 %	理由 %
都市中流	48 女兒の性質、行動	42 母親との親密感	22 家族の幸福	11 子供には異性の兄弟姉妹が必要	10 親の好む性別
都市下層	54 母親との親密感	40 女兒の性質、行動	18 家事の手伝い	15 老後の親密感、慰め、世話	8 親の好む性別
地方居住者	41 母親との親密感	34 女兒の性質、行動	30 家事の手伝い	8 子供を産んだ満足感	7 老後の親密感、慰め、世話

【Arnold et al 1975】表4. 13より一部抜粋

ことが出来たわけであるが、これに対して韓国の女兒観はどうだろうか。少なくとも（表10）からは女兒特有の性質や行動といった側面と母親との親密感を中心に期待されている様子が分かる。一部、地域的に家事の手伝いなどの簡易労働を期待されたりもしているが、上位にあげ

図4 日本と韓国における女兒の価値類型



られる項目のほとんどは「情緒的価値」に属する内容であると考えてよい。このことは同じデータによる性的選好を中心とした他の報告書においても支持されている(表11)。このように、韓国における女兒への期待としては愛らしさ、従順さなど女兒の特質と母親との親密な関係が重視されているといえよう。

一方、日本の場合も(表12)から見るかぎり韓国における女兒へ役割期待とそれほど大きな差異はないように思われる。地域を越えて女兒の特質と行動および母親との親密感がそろって上位を占め、韓国と同様に親の情緒的満足を期待するような結果である。いずれにせよ、表から得られるのは韓国と同様に親の情緒的満足を期待される女兒の共通した姿、すなわち「情緒的価値」をその中心に据えた女兒のイメージである(図4)。以上のように、情緒的価値を強く与えられた両国の女兒であるが、これに日本の女兒志向の資料を重ね合わせて若干の補足を試みたい。

日本の性的選好はバランス選好を強く打ち出しつつも、僅かながら女兒への志向をうかがわせるものであった。産業化の進展のなかで子供の経済的価値はとうに失われ、また韓国のような厳格な父系システムを持つわけでもない日本社会においては、子供に対する情緒的価値が相対的に顕在化するのとは必然的な流れであるのかもしれない。日本の男児が、地域によっては「跡取り」や「家産の継承」のように未だ社会・文化的価値を付与されている一方、こと女兒に関してはそうした期待からも自由である。女兒の場合、男児以上に情緒的な側面が期待され易い環境に置かれていることが推測される。韓国の場合には、男児選好が強いために、経済的価値や、社会・文化的価値から同じように自由であっても、直接に女兒への志向が現れにくいのかもしれない。一方、日本の女兒の場合、男児選好が顕在化しないぶん情緒的価値の受け皿としての女兒への志向が現れやすかったとも考えられる。

おわりに

日本の文化人類学の領域における「子供とそれを取り巻く文化現象」についての研究としては、従来から育児様式とパーソナリティに主眼を置く心理人類学的アプローチや学校に代表される定型的教育に焦点を当てた教育人類学的アプローチとして存在していた。

しかし、近年に入ってこうした伝統的な枠組とは多少異なる視点からの発言が盛んに行われ始めたように思われる。出産や育児を女性の視点から再考したり、子供の生活世界をひとつの自律的な「異文化」として捉える視点などその例である。もし、近年のこのような子供に関する文化人類学的な研究を、その視点によって分けるとするならば、それぞれ、1. 女性の視点を導入した出産、育児の研究、2. 大人が子供に付与した意味の体系を解読しようとした試み（子供観の研究）、3. 子供が発する彼ら独自の意味世界を解読しようとする試み（異文化としての子供研究）、4. 異文化あるいは自文化のなかの子供の生活実態についての民族誌的試み（民族誌的子供研究）として分類できるかもしれない。

小論はこのうちの大人の眼差しを中心とした子供観の研究として位置付けられる。今回は特に、子供観の日常的な側面に焦点を絞り、親子関係における役割期待を中心に、日本と韓国および性別による子供の価値とその類型化を試みた。方法論的には多くの課題も残しているとはいえ、比較という操作や性的選好の資料を援用することにより、両国の男女別の役割期待の特徴についての印象をいどは把握することが出来たと思われる。

韓国の男児には家系の継承者（社会・文化的価値）や老後の扶養者（経済的価値）としての期待が大きく、女兒の場合にはこうした期待からは自由で、むしろ情緒的満足（情緒的価値）をもたらす存在としての期待が大きかった。一方で、日本の男児は韓国の男児の家系の継承や老後の扶養のような実際的な役割期待は比較的希薄であり、家族の絆や生きがいといった情緒的満足をもたらす存在としての期待の方が強いように思われた。女兒に至ってはその情緒側面における役割期待がますます強く、それが全体的な女兒志向の「きざし」を生んでいるとも言えなくもない。

このようにして得られた性別子供観は、その資料の統一性や子供の価値の類型化などの点において、未だにきわめて不十分なものである。前者に関しては今後の組織的な意識調査をまつ必要があるだろうし、また後者に関しても、女兒と情緒的価値の結び付きに関する日本文化における「制度化」の問題や、子供の情緒的価値が市場経済のシステムの中で子供関連商品として消費される過程などについての理論的検討が残されている。それは、先進産業社会も含めた幅広い子供観の枠組を設定しようとするが故の課題でもある。

小論ではいわゆる文化の深層としての子供観とは異なる親子関係における日常的な子供観を中心に見てきた。しかし、日常生活のなかでの親たちの期待のあり方も、結局、宗教規範や親族構造など文化における枢要で「かくれた」(implicit)部分と密接に関連しており、これを単に文化の表層的な問題として片付けるには、あまりにその根は深い。日常的な文脈における子供への意味付けのあり方に関しては、文化人類学的な子供観研究の重要な側面として、今後も引き続き注視してゆく必要があると考える。

(注)

- ¹ 柳田国男の「小さき者の声」(ちくま文庫22巻)、「子ども風土記」(同23巻)および岩田慶治編『子ども文化の原像』所収の子供観に関する論文などを参照のこと。
- ² 例えばインドの例として(Miller 1987)に紹介している。また、中国の例に関しては『現代のエスプリー-中国の人口問題-』No190などを参照のこと。
- ³ 佐藤(1992)は調査方法ごとのメリット、デメリットを詳細に検討し、バランスのとれた社会調査の方法論についての見解を示している。
- ⁴ 調査結果においては、一般に子供を持つことの意味として低い階層ほど経済的要素を重視し、高い階層ほど相対的に心理的要素が顕在化している。同様なことは農村地域と都市の間でもいえる。さらに、タイやフィリピンなど開発途上国に経済的要素の重視が目立ち、日本やハワイのような地域では子供を持つ意味として経済的要素より心理的要素を強調する傾向をうかがうことが出来る。(Arnold,1975 p130-135)
- ⁵ この報告書においては、1. 六ヶ国と三つの社会経済集団という変数に加え夫婦別というさらなる変数を増やすことによるデータの破損(breakdown)をさけた。2. 夫婦別の分析では国別や社会経済集団別に比べ、それほど大きな差異が見いだせなかった。という二つの理由から夫婦別の集計はなされていない。(Arnold et al 1975 97)
- ⁶ ソウル在住の20才以上69才までの1,608名に対し、調査票による直接対人面接により1991年6月24日～7月14日にかけて実施された。
- ⁷ 日本の戦後のイエ意識の変化とその実態に関しては、例えば『日本の人口・日本の家族』(1988)の「地域社会と家族」の章など参照のこと。
- ⁸ 全国の20才以上の男女3,000人を対象に(有効回答2,210人)1986年3月4日～3月10日まで個人面接聴取により実施された。
- ⁹ 日本、アメリカ、イギリス、フランス、タイ、韓国の六ヶ国の10才から15才までの子供及びその母親、各1,500サンプルを対象に、1979年9月10日～10月30日まで個人面接聴取により実施された。
- ¹⁰ 日本の出生力統計に表れた女兒選好への「きざし」を解釈する際に留意すべき点は、調査の方法それ自体が女兒選好の意識を反映しやすくできているということである。特に夫婦調査の場合、調査に回答するのは夫ではなく婦人のほうであり、この時点で子供の性別選好に対する性的なバイアスがかかっている。独身者調査の結果〔表6〕にも表れているように、一般的に男性の場合は男の子を、女性の場合は女の子の出生を望む傾向がある。すなわち、日本の統計資料に表れた女兒選好の背景には、こうした調査手続き上の制約が存在することを確認しておく必要がある。しかし、こうした調査方法上の問題だけで上記の「きざし」を説明できないことは言うまでもない。たとえ女兒への志向が女性に限定された意識のあり方であるとしても、それが一定の期間を経て増加傾向にあることはまぎれもな事実である。このような事実に関しては、やはり調査手続き以外の背景を考える必要があるだろう。
- ¹¹ 例えば李興卓(1987,1988)や李&李(1987)など参照
- ¹² 韓国における男児選好の変容とその背景に関しては坂元(1991)で触れた。
- ¹³ 例えば、女兒を生みたい理由として「育てやすい」「優しくかわいい」(財団法人母子衛生

研究会によるアンケート調査記事：毎日新聞／1989／5／28）という意見や、「男は責任が重い。いい成績、いい仕事。女の子なら人なみに育てて結婚すればいい。楽だと思う」「男は女しだい。せっかく育ててもどうなるかわからない」「バレエやお花を習わせたり、おしゃれをさせたり、楽しみが多い」（安産教室の妊婦への質問、育児用品メーカーが行ったアンケート調査記事：毎日新聞／1987／1／5）という意見（いずれも女性）が紹介されている。

参考文献

アジア女性交流・研究フォーラム

1992年 『日本と韓国の家族意識の比較研究』

Arnold.F.et al

1975 The Value of Children:a cross-national study East-West Population Institute East-West Center honolulu hawaii

Arnold.F.and Kuo.E.C.Y.

1984 The Value of Daughters and sons : A comparative Study of the Gender Preferences of Parents Journal of Comparative Family Studies Vo 1. XV, No. 28 (Summer)

阿藤 誠他

1988 a 「結婚と出産の動向－第9次出産力調査（夫婦調査）の結果から」『人口問題研究』第187号

1988 b 「現代青年層の結婚観と子供観－第9次出産力調査（独身者調査）の結果から」『人口問題研究』第188号

岩田慶治（編著）

1985 『子ども文化の原像－文化人類学的視点から－』日本放送出版協会

人口問題審議会他（編）

1988 『日本の人口・日本の家族』東洋経済新報社

小林臻・唐沢幸子

1989 「妊婦の意識調査（第一報）－妊娠・出産・育児について－」財団法人 母子衛生研究会

Lee,Hoon Koo and Lee,Sung Jin

1973 Boy Preference and Family Planning Psychological Studies in Population/Family Planning Vo 1. 1, No. 6

李 興卓

1988 「人口状況と将来展望」『現代韓国社会学』（韓国社会学会編 小林孝行訳）新泉社

Miller,B.D.

1987 Female Infanticide and Child Neglect in Rural North India in Child Survival.Nancy Scheper-Hughes(ed.) Reidel Publishing Company.

大淵 寛

1991 『出生力の経済学』中央大学出版部

日韓の親子関係における子供観

坂元一光

1991 「韓国産育民俗の一側面－男児選好の背景と変容を中心に－」『比較民俗研究』五号
筑波大学比較民俗研究会

佐藤郁哉

1992 『フィールドワーク』新曜社

総理府広報室（編）

1987 『日本人の家庭観』（大蔵省印刷局）

総務庁青少年対策室（編）

1987 『日本の子供と母親』（大蔵省印刷局）

Williamson, N.E.

1976 Sons or Daughters: a cross-cultural survey of parental preference Sage Publications

横川寿美子

1991 『初潮という切札－少女批評序説－』JICC出版局

Zelizer, V.A.

1985 Pricing the Priceless Child: The Changing Social Value of Children Basic Books, Inc, Publishers

【韓 文】

李 興卓

1987 「男児選好が出産形態および家族規模に及ぼす影響」『韓国の出産力変動と展望』韓国人口保健研究院（ソウル）

李 奎植・李 任田

1987 「差異出産力と避妊実践率」『韓国の出産力変動と展望』韓国人口保健研究院（ソウル）

金 泳謨

1990 『韓国家族政策研究』韓国福祉政策研究所出版部（ソウル）

朴 在彬・趙南勲

1984 「性選好による過剰出生数の推定」『人口保健論集』第4巻1号（ソウル）